2021年3月25日

2020年度「障害者スポーツ調査研究報告書」を発行

当財団は本年度の障害者スポーツ調査研究活動結果をまとめた報告書を発行いたします。

本年度は昨年より取り組んできた国内外の大型障害者スポーツ競技大会に出場経験のあるトップアスリートたちのスポーツキャリアに加えて、新たにコロナ禍にて行動が制限された障害者アスリートの実態調査を実施しました。さらに昨年実施した「チャレンジ！ユニ★スポ」（障害者スポーツをユニバーサル教材として活用した体験事業）のアンケート結果より子どもたちの意識や行動の変化について掲載しています。

なお、本報告書は全国の障害者スポーツ関係機関等へ配布の他、当財団ウェブサイトでも公開します。

https://www.ymfs.jp/project/culture/survey/014-social-environment/

■報告書タイトル

「　障害者スポーツを取巻く社会的環境に関する調査研究

－ 障害者スポーツ選手キャリア、コロナ禍の影響、ユニ★スポ体験の効果に着目して －

■報告書の概要（全3章で構成）

【第1章】　障害者スポーツ選手のキャリア調査

障害者スポーツのトップアスリートたちの個人史を追う形でスポーツを始めるに至った経緯や活動状況を、環境・支援・制度・時代背景など様々な視点からヒアリング。

【第2章】　コロナ禍における障害者アスリートの実態調査

コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言（2020年４月7日発出）により、日常生活をはじめ、練習環境や大会参加など行動が制限された障害者アスリートの実態を調査。

【第3章】　チャレンジ！ユニ★スポにおける児童生徒の変化

2019年度、静岡県内の小中学生約1100人を対象に実施したボッチャ体験会（座学と体験）で収集した3回のアンケート調査結果（体験前、後、数か月後）より、子どもたちの障害や障害者スポーツ等に関する意識や視点がどのように変化するかを分析。

【執筆責任者コメント】　藤田紀昭　（日本福祉大学　スポーツ科学部　教授）

パラリンピックが延期されたため、私たち研究プロジェクトも予定していた調査研究を一時中断し、今できることを中心に、三つの調査結果について報告することとしました。「障害者スポーツ選手のキャリア調査」からは子どものころからスポーツに親しみ好きになっていることがいつ障害を負ったかに関わらず重要であることがわかってきました。「コロナ禍における障害者アスリートの実態調査」からは正しい答えが何かがわからず、戸惑いつつも目標に向かって少しでも近づこうとする選手の姿が浮かび上がりました。「チャレンジ！ユニ★スポにおける児童生徒の変化」では障害者スポーツを体験することで子供たちの意識が変化する点が明らかになりました。是非ご一読いただき、ご意見、ご批判お寄せください。

この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。（担当：大庭）

公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団（YMFS）
〒438-8501　静岡県磐田市新貝 2500
TEL：0538-32-9827　FAX：0538-32-1112

Yamaha Motor Foundation for Sports（YMFS）
2500 Shingai, Iwata, Shizuoka, 438-8501 Japan
Tel：+81 538 32 9827　Fax：+81 538 32 1112

【参考資料】 ※報告書の主なトピックス（文章中は敬称略）

■第1章 『障害者スポーツ選手のキャリア調査』より抜粋

・**スポーツ開始の局面（中途障害）** ： 病院やリハビリテーションセンター等の医療職や社会福祉協議会等の福祉職から、情報提供を受けるケースが多い。

・**スポーツ開始の局面（先天性障害）** ： 学齢期の体育やスポーツ経験がその後のスポーツ活動の開始に大きな影響を及ぼすものと考えられる。

・**スポーツ開始から継続へとつながるプロセス** ： ここで重要となるのが、種目ごとのクラブやチームの存在である。同じ立場の人々が競技をしている姿を目の当たりにすることが、その後の積極的なスポーツ参加へとつながっている。

・**アスリート雇用** ： スポーツ継続に影響を与えている要因として注目されるのが「アスリート雇用」の存在である。大会への参加や海外遠征など金銭的な負担が増加していく中で、「所属先から支援が重要」となっている。

■第2章 『コロナ禍における障害者アスリートの実態調査』より抜粋

・2020年に発出された緊急事態宣言下において、**多くのアスリートが練習の拠点を失い**、結果として、練習できる環境は、**自宅、もしくは自宅周辺**に限られた。

・また、この期間を**学業や資格取得に向けた勉強に取り組む**など、時間を有効的に使うアスリートが多かった

・様々な新型コロナウイルスに関する情報が流れる中、**自分自身で情報を見極め行動に**移していこうとする姿勢の人が多かった。一方、先行きが不透明な中で、予選会の延期など不安を抱えているアスリートがいたことも見逃せない。

・緊急事態宣言の解除後、感染リスクを抑えるために、**自らの行動や立ち居振る舞いに変化**があったアスリートもいた。

■第3章 『チャレンジ！ユニ★スポにおける児童生徒の変化』より抜粋

・ボッチャの感想について、**思っていたより面白かった**（87.6%）が最も多く、次いで**友達とボッチャをやってみたい**（67.6%）、**ボッチャ以外のスポーツをやってみたい**（67.5%）となり、多くの児童生徒が前向きな意向を示した。

・障害のある人との距離感に関する質問（仲良くできる？　一緒にスポーツできる？　友達になれそう？）について、体験会**実施前よりも実施後に「はい」の回答割合が増**え、一定期間を経過してもその**意識が定着している**ことが示された。

・一連の学習内容が小学生においては障害のある人に対するイメージをポジティブな方向に変容させることが示された。

・小学生中学生ともに、障害のある友だちとスポーツをするために**自ら主体的に関わっていこう**とする意識の醸成や必要な場面で**アダプテッドを適用しよう**とする意識があることも明らかとなった。